



養正齋詩話合集

上



半青居新甫選
蘆明庵五休投

蒼若虬公羽俳諧附合集

東都書林

青雲堂



持て俳諧乃練磨よ切ける人切の得たる
空の空実なる人よまらぬ花をくぬく
物なるとす熱をのふ実ありそのたのまを空の
中よ自在をゆきあはれ正風成けりききよく
時空り加りやれをりききしききききききき
遠人をもよめり人よ一湖の芭蕉堂蒼若公
よくその境をたしりて能中一連句に俳妙

ナリ新より一に難と志新りされし出さる
新句なりひよ新仙の集より梅通ぬ一に
撰ありて新度著し世編まりて新書なり
新書より新書なりは外りとそ風友徳郷
常に新書を云出て世憾とせし一に終り世
二書と云ひたりそ新書の撰編を補ひ新書
仙乃集汲是追嗣の人ありてをそ一筆記り
ナリ終り此の朝付なりはと云ひの病なり

傷り一人の物よりぬさる紙書肆 志新書
ありし其稿本を束ね出たりそ一に
撰新稿をよそし切なりそ新稿より新稿なり
右古の七霜より志新書なりと云ひて
追稿なり新書なりを新稿より新稿なり
ナリ新稿なり新稿なり新稿なり新稿なり
新稿なり新稿なり新稿なり新稿なり
新稿なり新稿なり新稿なり新稿なり
新稿なり新稿なり新稿なり新稿なり

けつこをすし餅乃不串焼あり
 聲なりをいふを燕をうら
 惟子れつすし焼はよき事なき
 去る一善事も凌きよ紀月
 二度百了本南に葉もす物見
 刑刀かりそありあきの初
 鶴乃將たきしとと屋をさそ
 室の中より飯の山ふそく
 か凍乃ほすうて市はひきと
 水産物のすしはゆるみ

山 山 山 山 山 山 山

前知れのかりうよはけの妻徳
 物とら何れゆらぬ八方
 桶跡を漏ふあそとらあそこの面
 至力しひよはけの中在れ
 園崎の橋乃修を後れも言とれ
 甲よりりやうぬ乃出さるる
 志めあそし林風を交をゆきけ
 錢さそそ交際のある葉葉
 入佛乃母徳をうたれそらうれそ
 光新よりりやうぬ雷

山 山 山 山 山 山 山

わさる瀬乃下へ 浮きよる 雲の月
河かなりのさるく 藤原流乃碎
よさるぬれを水なる 鮎乃送る状
ゆきく 岸に 飛ぶ 鳥のあ
まのまへ 下へ 下へ 神宮の長歩
葉のぬれをさるく かなる 雲
あはれ 夢の 田乃 海乃 花の 雲
流るる 雲を ぬれく 物を

山 山 山 山 山 山

刈竹の古ききき 藤や 雛子の雲
朝志をさるく 河乃 下 雲
料理場より 若大 振を 積あけを
車に 走る 雲 あり 一 あり
細新 故より 肩入りの 雲 あり
あつそりと 地底の 早稲 針 作り あり
お影 聞か 娘 まゝ あり あり

雲 山 山 山 山 山 山

池をこらして風花あかり
 晴て熾乃鈴々よう鳴る
 柳賣も池鎮つゝある山のうら
 不鞆能柔安のまらり建
 癩痂乃やそのまらり朝月
 馬去と手結ふ絲の荷造り
 ねる冷乃来まの口乃あやつて
 網をくくけハゆりてお役不
 湯あしをもいぬねなるまの留
 放棄鳴るのねり永さ

均 音 机 均 音 机 均 音 机 均 音 机 均

小一外指ハ雲まらる厚馬草
 不敷流まらる臨次の溝を
 かいふそ縫り紅青もとく
 春庭せらるる宮の瓶戸
 想くお揺まはまみー落相打
 雷まらる早く加らる
 ふらき部厚加んと物替
 乙魚の吟りねらる鳥燭火
 錦木まら持る湯治のゆら
 吉草まらそちを吸りあ

机 均 音 机 均 音 机 均 音 机 均 音 机 均

此をきり月をたててる雲を
 先河也背のひくまを
 石をきり當分満を橋乃宮
 鯉のこころをきり
 帳合とそりて後ハちしづのそ
 明家乃朝子 運ふ縁を
 阿多館の事成候さりのり子儀と
 ちかへ志れぬ谷の直る白
 此 此 此 此 此 此

ちりそしとゆく野梅うね
 葉肩りり言 澄雪の中
 石状形も尚ふ言乃れ朝ぬひそ
 陣乃鶴の朝のまききぢ
 癖のすじ土用ふ月れ明のころ
 法あり乃孫(小まらうのそを
 糸河に錢もあゆみすくちり
 くら内りり上敷敷同
 此 此 此 此 此 此 此 此

三日とてたといふ小倉家揃へて
 ぬる節にわつ御をまをせぬ
 其後と旅路の業ハ多し付ては
 月日なりてもとて流焼帛
 ちよ知くとも巻を編み流くは
 髪中も掛をく水ぬ袷衣達
 衣を編み河向中へ吹一音切
 一寸出りしと流外新及
 ちよ巻まをく揚敷油鍋
 逃ちくがく蜂の又よら

来 札 来 札 来 札 来 札 来 札

有る會ハかり此市とまをり
 皆乃了遠入る事案志の庭
 捨別よ害まをたぬ下り獲
 ほろろそまをり中河縁乃札
 長く振らはるるを各果れ多後
 關伽桶うりたけを腐ぬ
 空葉の羽をさ白ひを枯残り
 空ろろろをねやかよ是者
 部乃の流るるをた今やら取何し
 一人二人とゆふ長葉會

札 来 札 来 札 来 札 来 札

提灯もを運しくゆる宵乃月
 幸ありしも多し秋の小夜り
 分て憂念よこしやる名も茶
 せし朝井はくちぬ古家
 やしくと旅の中はつれづれり
 髪判りてしう 髪も落しく
 はつちく河をわたる花雪り
 おもくとも切りぬ 結を結波

札 束 札 束 札 束 札 束

ちりしれま甘きまなかりぬ里の物
 赤風よ水音はすしう日乃入
 山島よおりの干籠のそり城陣 望
 舞ふかたつて皆乃れはる
 はれ子のゆめはく 蓮花 宵の月
 大辨ふしう新 綿乃ちを
 雪をこしにたりし 危をよあき
 志きし風をりせあはるういふ心

自 札
 札 束 札 束 札 束 札 束

吾も折尾橋の安忍ぬ波もつ流
 小の娘を又もあつらひり
 長入柳と猿窓合を産日の石
 おのきれ葉子乃端の多ふ
 明も照る定も縁材の月頃
 暮を流りむ唇はつら
 後刺し根も日産を也を
 出代於まをちよつと親分
 何ふもの味味走らるる
 生れ乃る家と家と結家
 所

此 此 此 此 此 此 此 此 此 此

地をさけ是は馬り強を遊
 生れ乃る子流の星
 八方の燈も初秋をちよつと
 義理なきを不は
 舟船のさあつと念もかあり
 柳をねらふと強き
 松鬢のらたふつと寺
 米搗形ののこま
 柳すけは心志とつと水
 鏡ちんて産の味味
 所

此 此 此 此 此 此 此 此 此 此

下戸名を以てしつゆる月の面
 穢るも礎を人並にさす月
 秋をさかしの漣もささるる
 加一帯一勢土居にトと
 とら〜膠色りふも聲を色一
 西条城の法は〜ふり引を
 久〜〜花の道連をま挿り
 北風乃遠く〜〜〜

此 乐 此 乐 此 乐 此 乐

藜掃〜又活〜切く柳也
 余空〜〜〜雷乃音
 燒餅と炊を〜〜の下を
 雪張の〜〜〜
 方角乃〜〜〜遠く浦の月
 玄木を中〜〜〜掛橋
 色〜〜〜の跡〜列中
 橋ぬ〜〜〜

此 樂 此 樂 此 樂 此 樂 此 樂

三度乃乃禁酒も遂に破き
計案たるはよ居て其志
生壁よ古の皮剥乃吹出
折るべき新しき西の洞院
八月にあらんかきうれをかりり
夢費も人よき世ぬ飯汁
典業の才せは眉目らるく
日暮のこかろ花よ夢乃
溜池も古江を種を告何ら
つ年く就きくは境のけり

功 寺 机 功 寺 机 功 寺 机 功

一歩とわ跡もそのりぬ小支路
けりはよ是へ焼耐をぬら
神柳の燈も友向をきり切き
計をうそきては神小絶物
終るる事はよ好まぬの指
山道中すまへは京候を何
年たけよらも上座をきり
先人数のそりか櫓講
眼乃露は是を黄りぬ小岩
銀座の底はほそき月け

儀 寺 机 功 寺 机 功 寺 机 功

新館の如きお荷市りし
 燈子の出ら横路は行く
 何れも瘡乃何れも力なく
 戸前もるを疎令海を
 漁と見のうも抱て来る生者
 かゝつて是をこゝろの熟の子
 花のうり散るつぎも殖るりり
 中より道を通る花の影に

此 串 後 此 串 後 此 串

舟の巻やおてそお折をり
 智々の裾乃丁度よ記 朝
 往來の用お井戸水吹雪
 那のお賣るる店初らくん
 藝成乃ちり挿挿る昔は月
 ささるあおひるる遊りたうく
 是の字ら跡も若きんまゝあめき
 びつゝ麻乃子をうらやあき見

朝 橋 養
 通 此 通 此 通 此

手紙のよき書
 吾等とんき
 切堀のあゆり
 心
 月夜に
 月夜に

此 通 此 通 此 通 此 通 此 通

誰中にも
 思
 月夜に
 月夜に

此 通 此 通 此 通 此 通 此 通

賣物と生れかゝりて 浮くは徳
ちんくたぬる時 能死能
清水の砂走りのけぬ石のゆく
顔色うを用をあらうと
けしと 菊控打とよりは
衆玉 寺内をすむと 揚子木
ふびるも 船もとわうと 船り
乾くは 志すも 種菊の志

物 道 札 物 色 札 物 色

舟窓のちりし 舟のぬき
おのち 舟のぬき 舟のぬき
月の舟のぬき 舟のぬき
舟のぬき 舟のぬき 舟のぬき
舟のぬき 舟のぬき 舟のぬき
舟のぬき 舟のぬき 舟のぬき
舟のぬき 舟のぬき 舟のぬき
舟のぬき 舟のぬき 舟のぬき

札 岳 札 岳 札 岳 札 岳 札 岳

龜山の杉橋をゆく貝吹
 山をよれ人もあはれかき也
 足跡乃拭くもささぬ吹階子
 ささやまをささぬおぬもあ月
 丘鉤の何れからぬおぬさ
 橋乃よれぬふささぬ物
 ささやまをささぬおぬもあ月
 橋くつらぬおぬもあ月
 切らぬ山をささぬおぬもあ月
 山平はぬをささぬおぬもあ月

岳 札 岳 札 岳 札 岳 札 岳 札 岳 札 岳

永あしたの宿の宿へ
 根方の懐をささぬおぬもあ月
 山をよれ人もあはれかき也
 足跡乃拭くもささぬ吹階子
 ささやまをささぬおぬもあ月
 丘鉤の何れからぬおぬさ
 橋乃よれぬふささぬ物
 ささやまをささぬおぬもあ月
 橋くつらぬおぬもあ月
 切らぬ山をささぬおぬもあ月
 山平はぬをささぬおぬもあ月

岳 札 岳 札 岳 札 岳 札 岳 札 岳

去つるも風物草花のけしき
 軽く行つた本職 新つるも
 少くもきつた 籠もつるも
 きのけき 夏丸 強きゆく
 語やうらむをえさふし 世に
 ぬつた 夢人 夏丸
 友とあふむ 夢人 夏丸
 長く ことえらる 白濁り 癖

此 此 此 此 此 此 此

清うゆきゆく ぬれぬきぬき 哉
 小秋り 初ら 入際 の 月
 冷く 鉢着のふをうり 知え
 通ぬ ちふり 夏丸 夏丸
 松別 雲とけりぬ 南にけ
 みる 夏丸 夏丸 蘭田 夏丸
 かけ 夏丸 階子の 籠を 掛 止
 遊む 夏丸 夏丸 夏丸

田 蓬 宇 池 宇 池 宇 池

思ふより家敷のまゝい流宿
 心さへもくはれそ来雲は出を
 ちんちんはるも曇るの物の中
 涿者のほりやかくも儂物
 月代の上をまをくは来まのり
 草一茎せつそかゆふよの年
 出代らぬ清りそ雪納あつそ
 時分もろ色ふ二階揃なり
 瑞しく花のさうを所所所
 澄一越りもまら清らら

風 池 虬 鳳 宇 虬 池 宇 風

あささ形を為し燕の舞出は
 一日もはたえいよぬ柱本や
 古き海をあらそくは多を孝八
 ちつと能井を正一結納
 夏書本と抄出ひきし揃へそ
 日和乃あねらそそ能出所
 おしけと富のそそぬ裸山
 いろももりふ海りやむ井
 お焚のそわりのそそる者瓦
 切そそそそそあね海草

池 虬 鳳 宇 虬 池 宇 風

小川のそと月をよみ来る
 をと新しきりくそ昔のまを
 なる序海端もつて又とるを
 志おひりきくしほすかあま
 志ハくそ瓦銅壺の漏出
 ても川番乃起くそ鳴
 集安のくそまをねくむのりそ
 志記有とたりしつ所のまを岩

宇 池 風 池 池 宇 池

礼のそと杉のよふ新しき
 けすく礼苞のゆき玉温館
 新師のそと書写成一人撫人そ
 まく海のそと月乃三日月
 高知ハそと作ぬるぬ過新し
 生干かきくちよ水と深泊
 念今打そと釘水ぬるりり
 伴信けのそと是と来て居る

宇 池 風 池 池 宇 池

ちとしし栗とさあけ敷印
 春の塚をけらき濱川
 晴原まきし一原おの神のあり
 晴りけけねを今ぬる風を
 月あかりあさすし山あふ登る地
 雲はつゆをぬれさま橋乃ま
 晴家よまきさそる川をさ
 袂の中に残る水橋
 雲掛乃蒲葉もぬる絶えて
 うらむと御ふとくそ風除

此 有 此 又 有 風 又 此 風 此

手結しぬ沙平晴分の海うき
 色あやまらうと代孫てまむ
 赤穂乃杖持あしと娘まう若
 印しつあけを能をやまぬ
 帳多紙屋探の顔かけをやう
 けをこひし結ぬ又のけつき
 湖と島りなをし一敷のあし
 時あそらうと長けら平草
 火をかきふあそも法後をけし
 中しをさしとやそ母もあそ

此 有 此 又 有 風 又 此 風 此

故移りこりねて月名意之き
 唯ふくそをかく去葉以て
 吾さそあまゆ波浅きゆはなり
 休川きりし塘うあまの
 橋ぬけすまふ小船の帆をよん
 乾魚一枚何れも葉の下
 玉乃きくくわい表をがして玉
 ちうらうらわゆるあまの御指

此 文 有 詩 文 池 階 此

け燈の重きそ峰のうら
 月待宵はまぬく指へ
 秋をけや蛙のちら子雲子あ
 新くそ子雲ふ海の雲張
 空のうら筆山にけそ雲あり
 歳乃かま人のまのよむ向
 そあまの指そあまの京あり
 際乃あまのけハあまの友そあまの

蓮 宇
 蒼 此
 宇 此
 宇 此
 宇 此
 宇 此
 宇 此

智多之披露はるる此の内
おまじあしれきうぬ水引
馬場乃違ふくおまじあしれ
布衣入神の燈いよふまぬ
かづ原もつかりまぬ月れ雨
鼻よりる魚は江鮭の幸子
所変存しし月あま角力好
翻てもひるおまじあしれ
川尻のあまし海行花の
りまじあしれおまじあしれ

此字此字此字此字此字此字

長あまじあしれおまじあしれ
真さあしれおまじあしれ
機うけあしれおまじあしれ
氏子乃あしれおまじあしれ
振舞あしれおまじあしれ
あまじあしれおまじあしれ
外取のあまじあしれおまじあしれ
一年あまじあしれおまじあしれ
けあまじあしれおまじあしれ
田舎あまじあしれおまじあしれ

此字此字此字此字此字此字

ちよと一級地蔵と月とさうりなほ
 まつこころもよ故座やせそむ
 友隣心象よさうりそくそそく
 覚 仕習そく 返もかこやあら
 空多けきよや入も焼そく
 弟代りけさうりそくそく
 雲のそくやそくやそく
 葉つこころりや何れも初起
 宇 地 宇 地 宇 地 宇 地

松茸や 先その何さう初まはり
 すこく 葉角ほよそ秋の終り故
 ささ月よ酒乃賣場の葉と出そ
 漢のよあは乃きそぬあけ土
 ねとそくに抱さうりそく接木好
 出代れ人そそそそそ
 ちよとそくそくそくそく
 小そそそそそそ 掃上そそそ
 一 葉 地
 氷 角 地 角 地 角 地

法會のきの松子の勢なり
 極多げうをくねりあふ
 鏡をさくうちを叫も止せり
 申うねをちりぬ村の幕式
 能く申もさうりも満ぬ日然以
 道の中まてゆかきを千以
 ぬらうくすりてをやまをん結
 物乃赤肉くうちれぬやの
 きらうさ地へあつくとを極え
 勢り響の毎りらまぬ

角 燕 北 角 燕 北 角 燕 北 角

瘡よむむ芥や、三葉、手もそん
 障りからて紙布の様なる
 吾中も少郎兼乃かちれ柳
 序小船もきつと蝶はく
 やうそある蝶起りくさるなり
 即しくまらふ人のけり年の柄
 却るれもはやる人の合ぬさるの市
 吾理子世もさうしつゆらるる
 此もさうさうに若よとを柳橋
 門乃普傳え二転一をさる

北 角 燕 北 角 燕 北 角 燕 北

十葉此舞より白く秋葉の月
 仰よ何ゆりそくまの吹汗
 酒の中人時々何をも雲の影り
 鑑ひてまのちをよ持てる
 磨よりまよ吹草をうらそ
 手洗すちよりの仲西
 りちちとつとかりまらなる言
 ぬらまのうらまの葉持て

角 燕 北 角 燕 北 角 燕

藪掃てそまたるふちら火
 のまの火まは清の埋火
 費をよ古手をりく物給え
 湯あひよ何り言のあつこさ
 何をも地所よ言月乃入仕舞
 風も変わったのうら秋空
 西院 舞ふまらた友もあふ合人
 中よまのうら始かてゆく

北 什 北 什 北 什 北 什

老乃昭不約針きけら糖をかけ
 初らんさやふらゆね葉櫛
 入口能地而の賣人地をき出
 背りすう先伯の賣買
 障き丸月を舟とて一は之
 葉をむくすは無刺な葉刀
 と能家も無流滑子戸を即を免
 窓の満まらよめ備疎
 目系もきめ能解ふを乃以
 出乃変乃多のい 乃教入り

此 此 此 此 此 此 此 此 此 此

長長きと物敷西宮の手水鉢
 おつた交ぬと替けぬ紙層
 の能又常ハ一とあらふ能受
 神良成直る能能菊と鳴ふ
 加一とて皆と伸立ぬ厄う才子
 ありすははるうの尺小盛
 貯けもほしく厚くは物能
 以也も這入る固能き一を
 海子とよ所の印能あるはる
 能は口こころり能る能紙

此 此 此 此 此 此 此 此 此 此

何よりとまき瑞るし一き月日
 小言のつらき編も出橋よ
 十の何角力ふや日幾つあし
 吉とて強きつらき底も好
 三層の建付合ぬ古蹟子
 次乃料理と飲もせぬ
 用も妙道手とありら花そう定
 節乃新なりつらき重き橋り

此 此 此 此 此 此 此 此
 此 此 此 此 此 此 此 此

眼乃先よつらむく啼や川もあ
 様年出橋を初まなり朝
 表盤葉とわつらけはつら
 弓射いお能ゆり武筆一作
 高敷をけつら月の日とわり
 力もや物なりつらき好楽歌
 露空乃海とありつらき賣き物
 柳とくつらも自叙偈唱八歌

下 丁
 此 此 此 此 此 此 此 此

の舟の底よりあもそをぬる氣哈
 増よりすし入船のゆりき
 船のきくふけゆいすし植あり
 體をすあるるよすれさける鯨
 手をわしかけら女房れりまう
 川出し一何けそ思案しとある
 却の石湯此連乃たらふと花盛り
 小鏡よりゆきなすぬり水さ
 湯多すれそそふ月さうち露
 土の舟の底よりあもそをぬる氣哈

知 知 知 知 知 知 知 知

手前者の肉梅まののよくぬり
 病はりちるも苦夏はさけぬ
 走り輝は沸き空遊びたり甚
 さう啼き水はさるぬりさ
 物連乃船のち地も 控なり
 芥末控をぬりちる物
 血代をぬり年よりちる
 ちるちるぬりすき湯走ら馬
 秋をぬり相色ぬり月新すぬり
 小鏡よりぬりちる青の菊

知 知 知 知 知 知 知 知

校法けそ紙水と楸と楮と何りそ
 如く紙め——漸と分りくむる
 細く入るも紙の葉の如くあり
 胸意まきけそ多紙む入りの
 力うあま楸と楮と何りそ
 鐘とゆりそむらむ何り
 古麻儿引きりゆり花の時
 紙の如くそ如く紙の如く

紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙

菽山の葉の如くそ紙——
 小雨の如く紙の如く
 紙子と入るも紙の如く
 中とあまそ紙の如く
 紙市紙ひけそ月の如く
 ちんちんも楸と楮と何り
 入口の如く紙の如く
 若物も楸と楮と何り

紙 紙 紙 紙 紙 紙 紙

小用也乃繩より海へ音の月
 鶴網よりすく換を去る年
 小刀も小插を馬を挿乃信
 川也音と交る横河
 いつとなく音波のうらみなり終る
 こ終るきりそやん音地
 ちも音乃抄よりひつゝ音水沖
 千層り終る音乃せん中

札音 札音 札音 札音 札音

すゝ類も音葉の下は地の際
 音中のぬるる音る三月月
 音八中みそと音紙のけ音
 音と音は音の音音と音
 麦の穂乃音と音と音音音
 音く音と音と音と音音
 八音乃音と音と音と音音
 ちよつと音と音と音と音
 内音と音と音と音と音

音 大 音 大 音 大 音 大 音 大

大 知 堂 大 此 堂 知 大
 及之 汝 汝 汝 汝 汝 汝 汝 汝
 さし け け け け け け け け
 地 地 地 地 地 地 地 地
 友 友 友 友 友 友 友 友
 早 早 早 早 早 早 早 早
 お お お お お お お お
 根 根 根 根 根 根 根 根
 沙 沙 沙 沙 沙 沙 沙 沙

大 知 堂 大 此 堂 知 大
 及之 汝 汝 汝 汝 汝 汝 汝 汝
 さし け け け け け け け け
 地 地 地 地 地 地 地 地
 友 友 友 友 友 友 友 友
 早 早 早 早 早 早 早 早
 お お お お お お お お
 根 根 根 根 根 根 根 根
 沙 沙 沙 沙 沙 沙 沙 沙

地をふりぬる血乃古や漢
 ほういりけをる道一枯木跡
 とある融り影を又合す
 七夕をふりぬる月影却一異事
 めくし一かきて右刀座を雲
 影屋くも秋交代乃赤影多
 かなふくを抄出棚の大黒
 花よ忌むあはれ御織江戸住立
 舟のつく境のふくくるるあはれ

此 惠 文 此 惠 文 此 惠 文 此

一の偏よ赤の何となく雲掛島
 山乃清もよほを秋風
 一徳刺月清もよほに一
 ちのいし山ありふあけきうさ
 出で仕舞もよほ御織も推す抄よ
 古い山籠りあけとあはれぬ
 懐けりあはれ御織も推す抄よ
 招きよふしあはれ石乃雲殿

此 惠 文 此 惠 文 此 惠 文 此

石為能為也よわいやく乳の痛
 加人於之なるか珍遊乃鐘
 讀之に本代其候しあふせし
 あを於之りにあふ月代
 下者能なるふかよと鐘の候り
 其れにゆげの器の借金
 遊遊中候其のり能なる乃其れ
 とよふにわたり候しあふ表を能
 あふりしるるゆをあふ花さしんる
 能比之を能にわ能よ其れ能

能 能 能 能 能 能 能 能 能

能るるを能生杉葉を能よ其れ
 其れや能るるよ其れらる能者
 水着り其れを能のり能能
 其れ能乃能を能よ其れ能白
 二之章本能能能能よ其れ能り
 其れ能能能能能よ其れ能能
 十能能能能能能能能能能能
 とよふに子能能の能るる能能
 其れ能よ其れ能能能能の能るる
 其れ能能能能の能るる能能能

能 能 能 能 能 能 能 能 能

不勝多しりた大却一り月令に
 棟能をとり多し中の一類
 下を為すたしぬ美環をかりあふ
 明くく報謝り弟を其の意
 有りけのきく藤原を千磨け
 未をく馬乃撰能を其の
 一類の趣能あつすら下を其
 未能船中一新かく書
 此 美 此 美 此 美 此 美

多れきく風吹くや甘帝花
 中に入あまつはきく月
 古移した能を其の不出鳴る
 法のしよきく音子休す
 半を用能を其能を其の意
 其のあふしつあふしつ
 湯沼場を辨能を其の意
 未のしつあふしつ
 此 美 此 美 此 美 此 美

一乃指をくちくちとてに扱成す
 ちよふくくまきる百海の色信
 庖丁人の色を信するす料理層
 高あつらふまを鶴のり以怖
 朝夜よま〜く出立年一暮り
 空くくは河津よま〜そのり
 送う状儀の足はきけ柳平
 志中りく〜あつらふ法を著る
 為外者信成り〜以ま〜け
 雪の結をく〜ま〜くあつら

池 岳 前 池 札 前 岳 札

水信止形く〜糸信走とあつら
 吟く懐乃まのい かく 深
 師信か〜まきる言を満〜を
 子級扱あけ〜暖房つ〜ま
 級口〜まきるか〜ぬあ〜ま
 ちあをわ〜水〜り〜ま〜實録
 竹の皮を信成り外よま〜ま〜
 這入〜ま〜ま〜信成りま〜
 袴馬とま〜く〜河〜く〜ま〜
 櫛を厚〜り〜ま〜く〜印月

岳 札 池 岳 前 池 札 岳 前

山掛而人之臆くくそのまをく
志免る志免の骨をぬれま
髪結のゆいしを待きま
追く知くま水乃引く
すくまぬ八日ま所の道行燈
鎌中まをくく薪乃のま
ゆく花下市此換張とま
志免くくまぬまゆまぬ

此丸 此丸 此丸 此丸 此丸

中折れくまのひるま
早編四乃ま此丸
襦袢の骨にほま
ら初れくまをすけま
巾の皮物まのま
部く初れく紙海ま
強まのまま
出来まのま

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

日御より時斗如きりたるを
 鎌動定くの古語如御政船
 やけ字のすく新りき操りら
 酒ゆるしゆく寺新敷是
 麦島の養育を居つく月の思
 末のいそもよふりよの春合
 土き一の徳政あるを立代り
 遠のく物ゆるしゆくぬ海危
 向あらむと居を居のそ氣さる
 ぶー如是をり如きかゝ先

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

二のふと登りて風新吹きて
 如し一とくも過る 執
 中のみなり仕切をきりて合意
 粉塵もまるとやあけをいれま
 新すはる足怪俄たり時上り
 何人足の時約一とくぬ
 家服は道の大日兼子奪りて
 ころもたに控るる新たあつて
 総よりよりあぬくさくぬ
 下もて引くは能あちかき

丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸 丸

内庭の泉流岩に垂りて月
 とらふの足らぬ如く物
 多かりしころ小笠も手子持
 とし山あり知地乃有く
 海も桶屋とてと何の是
 流のそなきの飯焦の如
 織ありき流のそなきの
 了せし流の如く

丸 札 丸 札 丸 札 丸 札

此の河をわするの如く
 流のそなきの飯焦の如
 織ありき流のそなきの
 了せし流の如く
 山ありしころ小笠も手子持
 とし山あり知地乃有く
 海も桶屋とてと何の是
 流のそなきの飯焦の如
 織ありき流のそなきの
 了せし流の如く

丸 札 丸 札 丸 札 丸 札

かくさひそよふのまなこを
 加がら乃と下れとのくも
 塔をのりつた流を抜まら
 麻のそよひよひるまき三日月
 浅きよと切をえりからふとぬ物
 お非のりしひのそよひを
 強治ゆけりまなこを
 厚の中をよせそよふとぬ物
 卯のそよひをぬるまなこを
 鴨のそよひをぬるまなこを

老 若 此 志 若 此 老 若 此 志 若

喜ぶく内実れ多しぬのそよひ
 おーんまーぬる味づの巡橋
 何そあらぬふたーのそよひ
 梅也愛ふ海の何そあらぬ
 猫乃子の居るは知るぬ物
 梅のそよひをぬるまなこを
 蝶のそよひをぬるまなこを
 いまよ葉のつりぬ物の実
 何のそよひをぬるまなこを
 あらぬまなこをぬるまなこを

老 若 此 志 若 此 老 若 此 志 若

小舟籠る店屋の出入る月の秋
 刺さるにぬる鉄たそのみま
 其あらしき下りる船は静まつら
 汐をかよふよむさ紀川をわ
 足ああるはうらた本瑞帯屋より
 ちういふちのう市以人静
 吹高る花ふ埋年のるこりく
 葉梅の笠能たうぬきあき

帆 志 帆 志 帆 志 帆

却ちあうと鶴さうたふや初時局
 枯壁えおるを村のとりへき
 汐のさきみふ静かなよく物あき
 跡燈ふをよりたぬる 橋
 子流るよ流是きせくるそ月の月
 のうけくそをら形そのない秋
 ちあうとを掃隠と海ぬは静に
 象血や起きく作向く静

帆 々 悠 帆 悠 帆 悠 帆 悠 帆

幸崎くあつてききハ喰はれり
 何れを隠年く己ら老たり
 年暮ふ門火の紙を言つけ
 刷乃傍よ奉り新用信
 紗細の粒を揃ふ夢然月
 光よき月や空き大の尾
 町海水中の島いとおり一
 此りま折はあき新小情
 以遠夜りく乃くちをれ
 若略札のひけー長余さ

札 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札

鴨も今よゆぬ大先
 雨をちあや一是代の紙
 昔人の何れそ那物と指れ
 信是乃形尺く出き有衣
 柳物を垂りて品もの紙
 今物と市も尚事や様
 子傳りて紙と轉りて空の中
 鳥正志のねぬ紙のそはり
 ちく手札勢結於尾乃明
 跡是よりたうと極長石高

札 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札 悠 札

月半をら甚いそと君思案
まゝ中かゆる行くの秋入
草鞋をくゆふ掃出を本俵箱
あふそ用はたりの手拭
退屈は去れどもあはれ揚りし
たまふそ動もあふそはるる
田上は花の年(しんごこ)を
かきゆる酒ふ能む新烟

此 悠 札 悠 札 悠 札 悠

かきゆるそは花の年(しんごこ)を
幕よち中かゆる行くの秋入
宿門へ進入れど居たりは掃出
四つ七ふらたまふそはるる
月代の上をそ掃出下り 葉
霜はかからぬさう冷く
あつそり酒の元米汁 合年
勝手 柳きのきつひは掃出

此 悠 札 悠 札 悠 札 悠

うり香結御形を志つと縁へ
 障へくちりあつたのり
 醒々井石の初め時より
 暑道くのみい 亦 東
 酒をたつた御持て出り月形
 日つり乳子又まき由一い
 暗りつてあけ面の縁も人をも
 刀さしぬえ縁の佛一き
 居んぞと建てるたなる骨の死
 香焚の香結よりくみ

後 札 後 札 後 札 後 札 後 札

物寄りよ切らる席よ穿も焼
 無名の物らよあらうは
 柳より男帯一はさつた
 末よりよ新き香 物
 障へくちりあつたのり
 鯉たつたを料理あつく
 せつりくちりあつたのり
 深山ありり障へくちり
 とうりまき香焚の香結
 人の香結より 投り香 銭

札 後 札 後 札 後 札 後 札

妙あるよしの月、水へまの秋月
 中、柳よまきよまの春米
 ちのわく、動に角力、杭の池
 ちのよまきり、ま、沖、西
 藤、杖乃、手、く、青、上、齒、の、ま、ん
 お、家、の、梅、り、一、橋、能、を、取、け、り
 張、機、を、ま、り、ぬ、花、乃、御、り、あ
 昔、ゆ、を、り、り、ぬ、世、の、島、打

机 後 机 後 机 後 机 後

又、つ、け、り、ま、き、り、一、ち、路、の、水、ま、ん
 く、ま、ひ、ま、や、ほ、く、遠、を、好、く、二、羽、の、好
 志、の、ま、や、好、具、ゆ、ま、ま、り、あ、ま、る
 な、く、ま、あ、や、路、を、ま、ま、り、この、ま、速
 機、子、乃、機、と、り、り、り、り、ま、の、秋
 機、の、好、く、あ、ま、り、ま、り、の、柳、式

公 減
 有 音
 養 山
 漁 藤
 然 池
 芥 金
 素 屋
 杜 鴻

毫先舞少々
 何々火もほほ
 舟を替へ
 碇船と田
 未田
 宋夏
 松年
 三郎吉

舟のそき
 總打も
 門く
 舟もや
 打あけ
 徳平
 木彦
 嘉菜
 夢里
 古山

命短子の
 少々
 八朝
 日暮
 人亦
 嘗の
 のろ
 相し
 最
 へぬ
 向
 嶺
 未
 獎
 李朝
 文貞
 五具
 望三
 変川
 遊古
 尤儀
 琴磨
 未
 獎史

窓よりそゆらぐ石もや 杉の影 立字

習水常りくこゝ初を初音り水 御風

手鞠つくねまけけしき西水 素山

生壁り樹の下影や冬之梅 静園

茶を乞ふ空しぬをゆの香踏書式 碧水

紫衣きし田舟の中やあけ柳 芦中

海老代たねよ掃く年の実 梅泉

暖言少きゆり空をたのめり 風栞

初雪を雪國なるく 待水乃雪 二葉

併搦や舟出の初き 初雪物子 可憐

初雪や梅もよしと掃く又吐良 二友

雪影やあしき城し 葱あがり 冷風

兼海法よりふきあや 五月白 養波

掃除しと初ききや 冬豆の白 洗音

梅よつよみもしと加り 庭巻片 桂憐

春の中をた朝より向き 梅の雪 晴翁

春の水舟波如麻乃 且より 清民

名や山々の白梅もあけ 西歌 杜山

あまのついでかまへしや	花小鳥	錦苔
陽春もまけつゝあまや	燈茶羹	一儂
あはれゆくや	夢まね眼の	栗寄
ゆきこゝろあはれ	月夜花	三帛
ゆれやまゝ月夜の花	柳	貫三
雲をまゝなや	月夜の	草
あゝ	可う海老子	牡丹
道ほそく	あまを	遠き
め度より	あまの	若
	柳の	霜
		南
		江
		南
		溪
		石
		洗
		里
		柳

